

2023年11月18日(土)

第7回

北海道大学映像・現代文化論学会大会

—発表要旨集—

◆ 研究発表 要旨

武田泰淳「ひかりごけ」における「罪」に関する考察

趙 文軒

本発表では、「ひかりごけ」(『新潮』1954年3月号)における象徴物であるひかりごけにしぼって、その特徴を明らかにしたい。また、罪の内容をめぐる裁判における結末のシーンを再検討することを試みる。

「ひかりごけ」は武田が1954年に、1944年の真冬の北海道において、知床岬で日本陸軍の徴用船が難破し、極端な境地に陥った船長が、船員の遺体を食べて生き延びた〈ひかりごけ〉事件をモチーフとして、創作した短編小説である。本作は一般的に「私」の紀行文と創作された戯曲二幕の三つに分けられる。「ひかりごけ」という題名は、戯曲において罪を犯した人間の首の後ろに、光苔(コケの一種、北海道指定の天然記念物)のような光の輪が現れるという設定からである。

先行研究では、作品の構造をめぐる虚実問題、いわゆる作品に描かれる事件が史実に即しているかどうかということが多くの研究で取り上げられてきた。また、これまで「光の輪」が象徴する「罪」が何を指すのかが十分に検討されてこなかった。

そこで、ひかりごけの取り扱い及び「罪」の内容を再検討したい。さらに、武田の書いた敗戦体験に関するエッセイや小説を補助線としつつ、本作における戦争と罪との関連性を明らかにする。とりわけ、戦争の加害責任という視点から、小説の結末で裁判側の人々の首にも「光の輪」が出るという設定を解釈する可能性を提示する。

最後に考察結果も含めて、武田における殺人と戦争と罪との関連性を明らかにしながら、彼なりの戦争責任に対する思考をあぶり出したい。日本の戦後責任について、国家の指導者はある程度議論されてきたが、一般の国民の戦争協力や戦争加担の責任はあまり追及されずに放置されている状態で、その独自性が明確である。

安部公房「友達」の人物造形と共同体概念

—「闖入者」から「友達」(改訂版)へ—

李 楚妍

1967年9月に安部公房の戯曲「友達」(1967・3)は第3回谷崎潤一郎賞を受賞した。受賞作ではあるが、ほかの安部の名作と比べ「友達」の先行研究は少なく、照明を当てられていない部分が多い。特に作品の改作、登場人物の造形、共同体概念の変容などの問題点は未だ十分に検討されていない。

1951年11月に、安部は小説「闖入者」を発表した。安部によると、戯曲「友達」は「闖入者」をもとに書かれた作品である。1974年に安部は「友達」をさらに改訂し、安部公房スタジオでそれを上演した。「闖入者」と「友達」との比較に関して武井昭夫や羽山英作の研究が挙げられるが、主人公と家族の造形についての分析は一義的であり、検討する余地があると思われる。友田義行は「闖入者」と「友達」との比較だけでなく、映画「友達」(1989)についても具体的に考察したが、「友達」とその改訂版との相違点についてはあまり触れていなかった。

本発表では、先行研究を踏まえた上でこれら「友達」関係の3作品を考察し、3作における人物造形と共同体概念を探究する。まず「闖入者」と「友達」を比較し、「友達」の主人公の持つ能動性を提示する。「友達」と比べながら「友達」(改訂版)の改善点を整理し、「友達」の改作過程をまとめる。

次に、主人公の家に侵入する家族の造形とそこから見た共同体の様相を考察し、この3作、特に「友達」(改訂版)の主題を明確にする。「友達」の最終版である「友達」(改訂版)において、家族の普遍性とその構成員の個別性は際立っており、共同体概念が相対化されている。三男は希望を語るのに対し、次女は絶望を語り主人公を殺したが、三男と次女の思想が表裏一体であり、同じ共同体観の二つの側面として捉えられる。最後に、3作の主題の変容は安部自身の共同体観の変容とも関わっているため、安部の共同体観の変容過程を提示し、「友達」の位置づけを明確にする。

少女マンガにおける同性愛表象論 -1970年代の作品を中心に-

郭 如梅

本発表は、山岸涼子「白い部屋のふたり」、一条ゆかり「摩耶の葬列」、池田理代子『お

にいさまへ…』といった1970年代の少女マンガにおける女性同性愛の表象を中心に考察する。加えて、70-80年代の少年愛マンガ、竹宮恵子『風と木の詩』、山岸涼子『日出処の天子』を比較対象として検討を試みる。

女同士の親密な関係に関する先行研究では、主に戦前の少女小説と90年代以降の少女マンガを考察してきた。一方、70年代の少女マンガについては、十分には検討されていない。70年代の女性同性愛の作品は少ないが、これ以降の少女マンガでも用いられる女性同性愛の表象パターンが既に提示され、ジェンダー規範とセクシュアリティ表現への問題関心が示された。それを踏まえ、少年愛マンガは親密圏における非対称的な権力関係の暴力性を示唆したと考えられる。

そうした同性愛表象における共通の問題関心は、家父長制によるジェンダー規範と親密圏の権力構造をめぐる問題系である。第一の問題点は、家庭秩序の攪乱に対して、ジェンダー規範は再強化されていくため、性的逸脱が不可能となったことである。第二は、ロマンチックな物語を通じて、ジェンダー規範が異質な存在を排除するプロセスを示したことである。さらに、排除された他者が主体性を再構築することの困難さも示唆されたことである。従って、同性愛の欲望が主に家庭機能不全によって生じたものの、主人公が悲劇的な結末を経て家父長制に再編されたという共通の表象パターンがある。

他方、同性愛表象の性表現には性差による相違点がある。女性同性愛の性表現は接吻と抱擁に止まり、性暴力に言及しないという特徴がある。それに対して、男性同性愛表象では、性暴力を詳細かつ大量に描写する傾向がある。性暴力の表現を通じて、親密圏における支配的な対人関係を批判することが可能になったと解釈する。

こうして本発表では、70-80年代の少女マンガにおける同性愛表象は、ジェンダー規範を顕在化させ、マイノリティの性的主体性の構築という問題関心へと議論を行ったことを考察する。さらに、男性同性愛表象は、親密な関係を平等に築くのが不可能であるという回答を提出したことを論じる。

ルサンチマンと疚しい良心、そして取り返しのつかない時間

——ブライアン・デ・パルマの映画について

李 良坤

アメリカン・ニューシネマを代表する映画監督の一人であるブライアン・デ・パルマは、これまで極めて両極的な評価を受けてきた。ヒッチコックの後継者と呼ばれる一方で、その拙劣な模倣者であるとも批判されている。スプリット・スクリーン、スローモーション、スプリット・ダイオプター・レンズなどのテクニカルな表現手法で作り上げた独特な映像スタ

イルは、クエンティン・タランティーノらの熱狂的な映画ファンを生む一方で、下品で深みがないといった酷評をも受けている。しかし、これらの言説の多くは、論者それぞれの主観や好き嫌いが混じっており、デ・パルマの一貫した作家性やその特徴的な映像スタイルの原理への関心が薄い。

ジャン＝リュック・ゴダールは『映画史』(1988-1998)「2B 命がけの美」の中で、デ・パルマの『フェューリー』(1978)における「ヘスターの死」という場面を引用している。本発表は、この場面をデ・パルマのフィルモグラフィ全体の縮図と位置付ける。それに基づいて『キャリー』(1976)や『カジュアリティーズ』(1989)などの代表作の主人公に関して人物論的考察を行い、「ルサンチマン」と「疚しい良心」の二つのテーマでデ・パルマの作家性を捉え直そうとする。そして、二つのテーマの根源的同一性を明らかにしたうえで、「時間の取り返しのつかなさ」をめぐって、デ・パルマ映画のクライマックスによく現れる異常に長いスローモーション及びスプリット・スクリーンという両極端の生成原理と関連性を検討しようとする。以上のことを通して、デ・パルマの映画に対する新しい見方を提示する。

◆ 講演要旨

演出の発見

三宅 唱

学生時代に映画を作り始めた当初は真似事と咄嗟の現場対応を繰り返すことで十分満足できていたものの、その後、職業として続けるにはあまりに危うく無責任だろうと不安に感じ、然るべき技術を身につけたいと試行錯誤していた時期に発見した一つの考え方を『許されざる者』(1992/2003)の比較を通して共有し、あわせてその後の自分の実践(主に『きみの鳥はうたえる』の予定)についても話したい。またこの発見をベースにした学生向けのワークショップについても話したい。さらに、現時点の葛藤や模索についてもなるべく話してみたい。

★講師紹介

三宅唱(Miyake Sho)氏

◎現職

映画監督

◎主な作品

・長篇映画

『やくたたず』(二〇一〇年/七六分)

『Playback』(二〇一二年/一一三分)

『THE COCKPIT』(二〇一五/六四分)

『密使と番人』(二〇一七/六〇分)

『きみの鳥はうたえる』(二〇一八/一〇六分)

『ワイルドツアー』(二〇一九/六七分)

『ケイコ 目を澄ませて』(二〇二二/九九分)

・短篇映画

『1999』(一九九九年)

『4』(二〇〇五年)

『TREE HOUSE』(二〇一三年)

『映画館最後の日』(二〇一六年)

『余興』(二〇一六年)

『長浜』(二〇一六年)

『ROAD MOVIE』(二〇二二年)

*長篇新作『夜明けのすべて』は2024年2月9日に公開決定。